



— 退任のごあいさつ —

3年間の成果と今後の課題

カンボジア事務所所長 安田理裕

～目 次～

3年間の成果と今後の課題	1
特集	
わたしが日韓アジア基金を 支援している理由	3
韓国の暮らしあれこれ⑤	7
スタッフ紹介	
法人格取得報告	8
個人情報保護について 事務連絡	

この度、約3年のカンボジアでの任期を終えることとなりました。この間、アンロンコン・タマイ村での識字学校の開校と運営、ルセイサン小学校への支援という教育支援事業に関わってきた訳ですが、これら事業が予想以上の成果を残すことができましたのも多くのみなさまのご協力の賜物と心から感謝しております。

振り返ってみますと、月並みな言葉ではありますが、本当に山あり谷ありの3年間だったと感じます。プノンペン市教育・青年・スポーツ局との共同調査でアンロンコン・タマイ村を初めて訪れたのが2002年9月。ハード面でもソフト面でも社会整備が整っていない状況で、村の住民の数や子どもの数など、事業の基礎となる正確な数字がなかなか出ずに頭を痛めたことをとても印象深く覚えています。

その後、住民も参加して行われた学校建設、2003年3月の開校式を経て、4月にアジア未来学校を開校。予想以上の数の子どもたちが学校に集まり、開校2ヶ月後には当初の4クラスから1クラス増設して5クラスになったのは嬉しい誤算でした。暴風雨や洪水などの自然災害、子どもたちの怪我や病気、厳しい村の生活の現状を見せつけられることも多々ありましたが、最終的には小学校へ編入していく「卒業生」も生まれ、その「卒業生」たちの通うルセイサン小学校へも国際協力・国際協力の輪を広げることができたのは大きな喜びと言えます。

これら3年間の活動で支援地域にどのような変化があったのでしょうか。1つのデータとして、アジア未来学校の開校前、アンロンコン・タマイには300人位の子どものうち、約半分しか学校へ通っていないという状況がありました。アジア未来学校では2003年4月からの1年間で中途退学者を含め249名の子どもたちが学び、それ以後も多くの子どもたちを受け入れてきました（昨年度の児童数については、4月集計予定）。住民の出入りが激しく、住民数や子ども数は時期によっても違ってきますが、現在では大部分の子どもたちが教育の機会を得られるようになっていました。また、昨年10月には、50名の子どもたちがルセイサン小学校へ編入し、小学校への就学率も大きく向上しました。村長や当初から様々な面で協力いただいた村の方々からも、村人の教育に対する意識が高まったという話を伺っています。こうしてわたしたちは、カンボジア政府も目標としている「万人のための教育」に微力ながら貢献し、アジア未来学校を起点とした基礎教育事業、「滑走路としての未来学校」という当初からの目標にも大きく近づいたと思えます。

この間、カンボジアも一見大きく変わった印象を受けます。3年前に降り立ったプノンペン国際空港は、空港ビルというよりもどこかの汚い倉庫という感じの仮の建物でした。夜、空港に着いたときの町の暗さと客引きバイクタクシーの強引さが、今でも忘れられない思い出となっています。今では最新設備を備えた近代的なビルが世界中からの観光客を出迎え、バイクタクシーやタクシーもきちんとライセンスを持ったドライバーだけになっています。エスカレーター付きの新しいショッピングセンターやホテル、レストランも増えましたし、市内を走るバイクや車の数も大きく増えています。日本などの各国や世界銀行など国際機関の支援により、国道の舗装や上下水などインフラの開発も進んでいます。国際社会からも認められた民主的選挙、WTO加盟と社会制度的にもカンボジアは大きく前進しているようにも見えます。

しかし、国全体の発展という点で考えますと、楽観的にはなれない状況も観られます。例えば、世界銀行の調査によると、国民のうち一日2ドル以下で暮らす人の割合は、1990年の85%に対し、15年後の今年78%（8%減少）と、大きな変化を見せていません。以下の表のとおり、隣国と比較しても、カンボジアがこれから進まなくてはならない道のりの長さを感じます。

国名	1990年	2005年	減少率
タイ	47%	18%	61%
中国	70%	32%	54%
ベトナム	87%	51%	41%
インドネシア	72%	45%	37%
ラオス	88%	73%	17%
カンボジア	85%	78%	8%

（世界銀行調べ。The Cambodia Daily 紙 2005年3月18日付から抜粋）

また、教育分野でも、2003年度には自主退学率が30%であったのに対し、2004年度には35%と高くなっています。（2005年3月25日付 The Cambodia Daily 紙）教育・青年・スポーツ省による調査では、カンボジアの子どもの5人に1人が過去12ヶ月間に自殺を考えたことがあるという結果も出ています。（2005年1月12日付 The Cambodia Daily 紙）こうした状況を見ると、今後はインフラの改善よりもむしろ、教育を初めソフト面での開発が重要な課題になっていくと感じます。

アンロンコン・タマイにおいても教育分野の改善が進む一方、一般的な人々の暮らしはまだまだ厳しい状況が続いていると言えます。プノンペンの中心から離れ産業と呼べるものもないため、村人の多くは市内中心部への出稼ぎで辛うじて収入を得ています。今年に入ってから、鳥インフルエンザの疑いのある鶏の大量死や火事と、保健や住環境に関する問題が根強く残っていることを再認識させられました。私は日韓アジア基金を離れることとなりますが、今後もこうした村の人々の現実をきちんと見据え、共に考えながら活動を行っていくことが大切だと感じます。

最後になりますが、これまで色々な形でご協力頂きましたみなさまに、心から感謝の気持ちを述べさせて頂きたいと思います。私が日韓アジア基金を去った後は、開校準備からこれまでずっと私のアシスタントを勤めてきたポット・リティが、カンボジア事務所を法人化した現地NGO「ポンロック・タマイ」の事務局長としてアジア未来学校の運営に当たっていくこととなります。今後もみなさまのご支援・ご指導をよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。（「ポンロック・タマイ」はクメール語で「若い芽」の意味です。）

特集

わたしが日韓アジア基金を支援している理由

風に乗って

高木桂子 アジア文化会館勤務

今年の3月は、初旬に東京に案外な雪が降りました。雪国の人には申し訳ないけれど、降り積もった雪が辺りを呑み込んで音のない風景をかいま見せてくれるのは、私にとって極上のオアシスです。

人がこの地球のどこに生を授かるか、私たちは選べません。地上に降り立った命は、誰もがその生を全うするのが望ましいことですが、なかなかそうはいきません。生まれた地域によって、人は随分と困難な歩みを強いられてしまいます。

能天気な主婦だった私が、そんなことを考えるようになったのは、アジア文化会館で働く機会を得たことがきっかけでした。17年間の専業主婦から抜け出して、アジア文化会館でパートの職に就いて15年。そう、15年前の夏の朝、家族を送り出して一人の朝食を、新聞小説を読みながら楽しんでいました。いつもなら見たことのない求人広告なのに、その日、小説の挿絵の下の小さな求人募集に目が留まりました。「留学生の宿舎・受付・パート募集」(なにこれ?面白そう・・・でも無理だわ、主人は朝遅いから8時からの仕事なんて出られない。下の子はまだ小学生だし・・・)なんて調子で、その日はいつも通りバタバタと終わったのですが、夜、布団に入ってからその求人が気になって仕方ありませんでした。翌日だったか、翌々日だったか、朝、何も言わないで主人を見送った後、スナップ写真を物色しました。どの写真も家族と一緒に私一人のではありません。そんな中でどうにか顔を切り取って履歴書に使えるような写真を選び、身支度を整えて外出しました。途中履歴書を買ひ、喫茶店に入りました。一人で喫茶店に入るなんて初めてでした。そこで履歴書を書き上げアジア文化会館に向かいました。

こんなへっぴり腰から私はアジア文化会館とつながりました。アジア文化会館で文字通りアジアの留学生と接するようになって、私は初めて身近にアジアの外国人を知るようになりました。お恥ずかしいことですがそれまでの私にとって、外国および外国人とは西洋社会が大部分だったのです。

受付の仕事に就き、留学生たちとつかの間ですが触れ合ううちに、私は懐かしい記憶を呼び起こされました。とうになくなってしまった子ども時代の親戚づきあいの光景です。10代から50代までの留学生や研究者の方々の心遣いは、国籍に関係なく、昭和20年30年代の我が家に流れていた空気と同じでした。やがて私は職場で見聞することを通じて、自分が現代史を理解できていないことに気づきました。たまたま書店で『閔妃暗殺』(角田房子著)を手にとり、夢中で読みました。なんにも私は知らなかったと思いながら。団塊一期生の私の歴史の勉強は明治維新で終わっていたのです。40歳を過ぎて出会った新しい世界のことを知りたくて、色々な本を読みましたが、私の頭の容量が小さくてよくわからないのが現状です。

2001年にアジア文化会館にいた韓国人留学生のウーさんが、「日韓アジア基金」を立ち上げたとき、日韓の人々の協力でアジアの子どもたちの未来に力を注ごうという理念に心から共感しました。私はすぐに会員になり、現在に至っています。

偶然目に留まった求人広告に応募したことから、日韓アジア基金に出会いました。あの時、風が吹いたのかもしれませんが、本当にささやかですがアジアの小さな子どもたちの健やかな成長を応援したいと思っています。

弱者と共に生きていくなかで

佐藤和之 校成学園中高等学校教員

私は数回のカンパと禹さんの本を買っただけで、イベントにも一度しか参加したことがありません。それでも、なぜ日韓アジア基金を見守っているのかというと、スタッフの高橋君と代表の禹さんが私の友人だからです。もちろん今でも、彼らとの偶然の出会いに感謝しています。2001年、私の勤務校を会場にして、第1回東京・沖縄高校生TV平和意見交換会が開かれました。東京側高校生の中心となって企画運営したのは、当時私の生徒だった高橋君です。実は韓国の高中生もTV参加の予定だったのですが、小泉首相の靖国神社参拝問題に韓国側の大人が激怒し、直前キャンセルとなりました。そこで釈明のため登場したのが、この高校を母校とする留学生・禹さんだったのです。また対照的に、最初は大人レベルで交渉が難航していた朝鮮高校は、高橋君が足を運んで訴えた結果、直前に参加OKとなり、会場へ駆けつけてくれました。このとき禹さんは、「頭の固い大人が文句を言うな」と憤慨し、日韓アジア基金設立の主旨をアピールしていました。その後、高橋君も大学へ進学し、ASYS(アジア・ユース・サミット)を発足させ、東京・沖縄・ソウルTV会議はもちろん、韓国や中国を相互訪問するなど、交流活動を継続発展させています。この二人が各々創設した組織に対し、互いに協力してきたことは周知の通りです。

さて、私自身が韓国を意識し始めたのは、1980年の光州事件からです。この事件の衝撃もあって、後に私は社会科の教員となると同時に、韓国の社会や経済を研究したいと考えるようになりました。大学院では、高校時代に光州民主化闘争に加わった留学生、韓国軍人、朝鮮総連の研究者らが学んでおり、彼らは今でも私の親友です。ただ、韓国や東アジアの研究は彼らにまかせた方がいいと思い、私自身はロシアないしユーラシアへと研究対象をシフトさせました。現在までロシア経済の研究を続けると同時に、チェチェン難民学校への支援等にも関わっています。これらも、かつてモスクワ大学の寮で、元アフガンツィ(アフガン戦争からの帰還兵)やその親友のチェチェン人らと出会ったことが契機となっています。但し、彼らの方は後に消息不明となり、今では会いたくても会えません。

ところで、ベトナム戦争を描いた韓国映画『ホワイト・バッジ』をご存知でしょうか。その中で、韓国兵がベトナム人を殺して耳をそぐシーンがありますが、これは豊臣秀吉時代の朝鮮出兵でできた耳塚を連想させます。そして1979年、今度はベトナム軍がカンボジアへ侵攻し、他方で中国軍はベトナムに侵攻する。こうしてアジアでも戦争の悲劇が繰り返されてきたのですが、犠牲は常により弱い国や階層に集中してきたように思います。この文脈で考えると、今でも苦しむ最大の犠牲者は、長年戦場となったカンボジアの子供たちかも知れません。

禹さんの表現を借りれば、母のような韓国と父のような日本が協力し、そのカンボジアの子供たちを育てているのが日韓アジア基金でしょう。その場合、父と母とが不仲では、子供の潜在能力を上げてあげることはできません。つまり日-韓-カンボジアひいてはアジア全体の関係の中で、私たち自身も歴史の壁を乗り越えられるかが、このグローバル化時代に試されているのだと思います。ちなみに、内戦下のチェチェンの子供は運よく命が助かったとしても戦争しか知りませんし、貧困にあるモルドバの子供は人身売買の標的となれば生涯親とも会えません。ですからアジア未来学校での経験はユーラシア諸国の社会問題に関わる私にとって、大いに参考となり勇気を与えてくれています。以上が日韓アジア基金を精神的に支援している理由です。

カンボジアの子どもとバングラデシュの子どもたち

福島忠男 日本聖公会川越キリスト教会牧師

日韓アジア基金の活動を通して、カンボジアの子どもたちの姿にふれますと、私のまぶたに彷彿と思ひ浮かぶ子どもたちがおります。それは、30数年前に出会ったバングラデシュの子どもたちです。

30数年前、わたしの属します日本聖公会北関東教区と米国聖公会のペンシルバニア教区及びバングラデシュ教会、この三つの教区が姉妹関係を結び、共に祈り、共働していきましょうということになりました。それには、相互の情報を交換し、共に交わり知り合ねばなりません。当時は現代のように、まだインターネットも普及しておりませんで、バングラデシュとは、どういう国なのか、どういう生活をしているのか、何をどうやって協力したらよいか、皆目分からない情報も少ない時代でした。わたしたちは、相手のことがまったく分かっていない事に気づき、共働しようとするなら、まず相手のことを知らなければならぬと考え、バングラデシュを訪問いたしました。

当時のバングラデシュは人口約9000万人で、その内92%は農村に住み、主要作物は米とジャムーンでした。しかも、農民の30%は耕す土地を持っておらず、また残りの30%はわずか40アール以下の土地を所有しているにすぎません。これらのことが貧困の原因であり、農業を営みながらも、村人の多くは十分に食べられないし、子どもは、栄養失調で5歳以下で死ぬ率が高いという状況でした。農業労働者が受け取る日当は、6タカ（80円）から12タカ（160円）が当時の相場で、米1キロが約4タカ（50円）でした。もし、首都ダッカの中華レストランで湯麺を一杯食べますと12タカで、一日の汗の結晶が吹っ飛んでしまいます。2000年国連統計によりますと、バングラデシュの一人あたりの国民所得（年間）は389ドル、日本の約90分の1で、30年前と変わっていません。しかし、日韓アジア基金が支援し、活動しておりますカンボジアの国民所得は、このバングラデシュよりもさらに低く、わずか261ドル、日本の約120分の1にすぎないとは、驚きです。

バングラデシュの平均寿命は46歳です。ですから大きくなならないうちに両親を失う子供、孤児が沢山います。施設や学校に入れる子どもたちは、ごくごくわずかで、幸いであるといえるかもしれません。船やバスの発着場などにおりますと、スーと男の子（男の子だけ）がやってきて、手を出して物乞いをするか、小物を持ってきて買ってくれとせがみます。男系社会のバングラデシュでは、男の子が何よりの稼ぎ手であるのです。バングラデシュのキリスト者は全教派（カトリック、聖公会、長老派等）合わせて3500人に過ぎませんが、病院、孤児のための施設、学校、職業訓練など、特に子どもの教育、育成に力を入れた働きをしております。バングラデシュ北東部の田舎町ハルアガートのそれらの孤児施設の一つを訪れました。

蛍が目の前をスーと飛び交う夕刻、私の歓迎会を開いてくれました。バーナーランプの光のもとで歌、ダンス、コミック劇、詩の朗読等、ことに北方民族ガローの少女たちが民族衣装をつけて一生懸命に踊り、歌うその姿に感激しました。たとえ貧しくとも、つぶらな瞳で純真に生きるこの子らに、平安がありますように祈らずにはおれませんでした。バングラデシュのこの子らと、カンボジアの子らの姿が重ね合わされて見える思いがいたします。

子どもたちの笑顔に支えられて

松田明美 書店勤務

たくさんの子どもの顔がある。一人一人の表情がよくわかる。ちょっとはにかんでる。笑ってる。緊張している。「写真を撮られるのって、どう?」「学校は楽しい?おもしろい?」「お家の人は元気かな?」写真の子どもたちに聞いている私がいる。

アジア未来学校に通う子どもたちの顔写真が、カラーでポスターにたくさん並んでいる。この子どもたちに私たちの支援が届いているのだ。

カンボジアに学校を建てるボランティア団体、NGO、NPOは日本だけでもたくさんあり、建てた学校の数も相当な数のようだ。

日韓アジア基金は学校を建てただけではない。運営はもちろん、授業にも直接携わり、子どもたちや取り巻く環境をサポートしている。私が日韓アジア基金を応援している理由のひとつがここにある。学校を建てっ放しにしていない。このことなのだ。現地のスタッフに全面的に任せられる日がくるまでしっかり基礎作りをしてきた。そして、子どもたち、家族、村、市の信頼を得てきた。

これまでの活動の報告をたくさん見るにつけ、ひき続き、学ぶことに一所懸命な子どもたちの顔を見たくて応援していきたいと思う。

話が前後になるが、もうひとつ応援している理由がある。それは、日韓アジア基金が作られたきっかけにある。

禹さんが「日韓の壁」をなんとかかしたいという強い思いで、日韓の学生たちとカンボジアの子どもたちの教育の手助けをしながら、その「壁」を越えていきたいと始めたことにある。共同作業によって、関係を育てていこうという考え方に共感するのだ。

最近中国の留学生も賛同してくれている。仲間がふえていくことが力になり、子どもたちの笑顔が支えになる。地道な活動だが、たくさんの人たちに「よろしく」と言いたい。

アンロンコン・タマイ村に火災発生

2月25日、アンロンコン・タマイ村で家屋8棟を焼く火災が発生。この火事で、未来学校の児童2名の家も全焼し、文房具や教科書なども燃えてしまいました。緊急支援として各家庭に米5kgずつの配布を行い（費用は12ドルでした）、市政府とのパイプ役として調整を行った結果、その後市からも援助物資の支援が行われました。

商品ご提供のお願い:フリーマーケット!!

5月に開催されるフリーマーケットにジュニアスタッフ有志が出店します。決して高価なものではなくて結構です。下記のものでございましたら、ご協力をお願いいたします。

未使用品：タオルセット・シーツ・カバー類・食器類
使用済みも可：夏物の衣類・かばん・アクセサリ

上記以外のものは、出店規則に触れる恐れがございますので、ご遠慮させていただきます。ご送付くださる方は、「フリーマーケット商品」と明記の上、以下の宛先までお送り下さい。期限は4月30日までとさせていただきます。

*誠に申し訳ございませんが、送料はご負担頂きたく存じます。

〒156-0055 世田谷区船橋1-3-17 井内 和夫
電話 03-3429-8897

韓国の暮らしあれこれ ⑤

韓国といえば「垢擦り」や「汗蒸幕（＝ハンジュンマク、サウナの一種）」、ヨンさまブームが始まるまで韓国に行く女性の目的の半分は垢擦りだったでしょう。当然韓国人はお風呂好きと聞いていましたが、どの家に行ってもお風呂は小さいのです。ホテルのようにトイレ・洗面台・シャワー・洋風のバスタブが一緒になっていて、肝腎のバスタブは、大柄な韓国人男性は入れないほど小さいのが不思議でした。どうやらふだんはシャワーで済ませるのがふつうのようです。本人たちに言わせると、韓国人は広い部屋が好きだから浴室はなるべく小さく作るのだと。お風呂屋さん（沐浴湯＝モギョクタンといいます）に行ってみると、これがまた、湯船やカランの配置から壁に絵が描いてあるところまで、日本の銭湯にそっくりでした。どうやら日本人が持ち込んだ銭湯が向こうでも定着したように思われます。そんなことから韓国の入浴文化に興味を持ちました。

‘60年代に少年時代を過ごした友人は、夏は一日中川遊びで過ごし、夕餉の煙に誘われて家路についた。そのころになると、宵闇に紛れて女性たちが川で沐浴していた。井戸端で行水することもある。冬になると、一部の大人は町の銭湯に行ったが、女性や子どもは沐浴できない。正月前などには、大きな釜で湯を沸かし、赤いプラスチックのたらい（日本語そのままにゴムダライと呼んでいたとか）に湯をはって、母親に体を洗ってもらった。母親がゴシゴシこするので痛かったが、そのあとのさっぱりした気分はいまでも覚えている。田舎では浴室がある家などはなかったから、たぶん、ふだんはみんな垢にまみれていたことだろう。だから韓国の垢擦りタオルは有名なのだ、とユーモラスに語ってくれました。（この項、つづく）
（波多野）

スタッフ紹介

千葉真衣子

みなさま、初めまして。昨年1月よりスタッフとして活動に参加している千葉真衣子です。ふだんは外国人に日本語を教える仕事をしていますが、学生時代から放浪ぐせがあり、今も時間を作っては旅に出ています。アジアの子どもたちのための学校作りに関わっていきたく、と考えたのもそんな旅の途中でした。「モノをもらうこと」でしか生きていけない子どもたちにたくさん出会ったからです。この子どもたちの生活を変えるきっかけになるものがあるのでは？と考えた時に「教育」という言葉が浮かびました。また、職業がら私の周りには公私共に外国人がたくさんいます。彼らとはいろいろ話しますが、「歴史問題」だけはまともに話し合ったり、ぶつかり合っても答えは出てきません。こうした壁を感じていた時に「日韓アジア基金」を知りました。問題があるからこそ、お互い協力し一つの目標を達成させる、というこの団体の考え方に強く惹かれました。その目標としていることが「子どもたちの教育」であり、まさに私にぴったりだったのです。



どんなに小さいことでも、活動の一つ一つが子どもたちの笑顔に繋がっているのを感じます。更に笑顔が増えるように頑張っていこうと思っています。

特定非営利活動法人(通称NPO法人)になりました

当基金は、3月1日付けで特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人として成立、発足しました。

法人化した背景、目的は以下の通りです。

カンボジアでNGO活動をするには原則として現地組織の法人化が要求され、その場合協働する日本の団体も法人格を求められます。今までは活動が始まって日が浅かったので、カンボジア政府に大目に見て頂いていましたが、アジア未来学校も開校後2年が経過し、いよいよ現地組織を法人化しなければならなくなりましたので、これに合わせて日本側も法人化したわけです。

当基金の個人情報保護について

05年4月から個人情報保護法が施行されました。当基金は保有データ数が少ないため、この法律の適用外ではありますが、皆様からお預かりした個人情報の取り扱いについては、法の内容に準じた下記の取り扱いを致します。

- 1 扱う個人情報の種類：氏名、住所、電話番号、eメールアドレス及びご本人から提供された情報
- 2 管理方法：当基金が定める個人情報管理規則に基づき管理致します。
- 3 用途：基金から皆様への各種資料、ご連絡の送付及びお問い合わせに限り使用し、ご本人のご了解を頂かない限りこれ以外の目的には使用致しません。但し法の定めのある場合を除きます。

05年1月～3月に会費・ご寄付を下された方(敬称略・別枠以外五十音順)

合田 稔	大坪 玲子	小林栄次郎	田村 義和	橋本 二郎	古川かおる	村野 博敏	吉村 悦子
井戸端裕子	小川 隆	佐藤 和之	千葉真衣子	長谷川容一郎	星 光雄	村松 悦子	和田 勝義
乾 寿夫	小川 英	佐藤 寿子	長崎 新一	春山 猷子	堀川 泰義	柳田 文子	
井上 卓也	金澤 潤子	柴田 義之	中里 弘樹	樋口 智子	松井ふみ子	山崎 美穂	
任 皓淳	加藤 恵理	高木 桂子	名原 壽子	久田 将史	松本 修一	山根 寛	
大澤 龍	河内 伸介	高橋 愛	沼倉 忠志	平塚 千尋	松本 昌幸	吉野 早苗	
日本聖公会川越教会		川越教会日曜学校		平和製罐株式会社		e-ボランティアネット	

ご入会・ご寄付のお願い(法人化にともない会費規則の小変更をしております。)

活動会員：年会費5,000円(学生、未成年者 2,000円)
賛助会員：年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)
法人会員：年会費一口10万円
ご寄付：2,000円以上おいくらでも

<郵便局振替口座番号>
振込口座 00180-2-25153
日韓アジア基金

活動会員：活動に積極的に参加いただける方

賛助会員：定期的にご支援いただける方

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けいたします。

<お問合せ先>

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内
Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

Eメール: iloveasia@ml-b7.infoseek.co.jp HP: <http://www.iloveasiafund.com>